

埼玉・教会・壮年

NO. 13号 2014年2月発行

「地域に開かれ、共に育つ教会」

「命の終わりは命の始め、ただ神が知る」

「神様の時、カイロスを待つ」

「幼児洗礼に7人の後見人」

「信仰継承を考える」

日本基督教団関東教区埼玉地区壮年部（委員長・松下 充孝大宮教会員）は、これまで「信仰継承」と「高齢者」の2つのテーマを課題として取り組んできた。3年前の東日本大震災と東京電力福島第1原発の放射能漏れ事故という予期しない出来事に遭遇、2年続けてこの問題に向き合ったが、再び、信仰継承を考えるライフワークに立ち返った。

和光市の埼玉和光教会を会場に2013年11月17日の礼拝後のひとときを、同教会の三浦 修牧師を講師に、「信仰継承を考える集い」を開催、12教会、39人（うち教職3人、婦人4人）が参加した。

講師の三浦牧師は、信仰継承を教会編・地域編・家庭・親族編の3つに分けてその問題点と在り方を論じられた。特に身近であるが故に困難さが伴う家族の信仰継承については、神様の業であり、ギリシャ語で機会（チャンス）の神、神様の定めた時を意味する「カイロスの時を待とうじゃありませんか。焦ることはない。そのために祈って祈って祈り抜きましょう」と熱いメッセージを語られた。また、地域編では、平日の教会堂を開放、近くに住むお年寄りや幼児を抱えた母親をお招きして、お茶とケーキで歌声喫茶や、育児を話し合うなどの地域活動を熱心に展開されている所沢みくに教会の最上 光宏牧師が特別講師として「地域あつての教会」という立場で、地域に開かれた教会のありようをスピーチされた。壮年部（協力）委員4人の信仰継承のエッセーも加えた。

「信仰の継承について考える」集い

開会礼拝「信仰の宿り」

「祖母、母から継承したテモテへの信仰の宿り」

「テモテの純真な信仰は真摯、誠実、純粹、そして殉教」

「キリスト者の祖母の死から5年、20歳の孫娘の洗礼」

「命の終わりは命の始め、ただ神が知る」



埼玉和光教会牧師 三浦 修 先生

信仰の継承というテーマをいただいた。そうだ、テモテへの手紙。祖母ロイス、母エウニケ、3代目がテモテというこの個所がピーンときて、これを選ぶことにした。

新教出版社が出している聖書事典によると、テモテという名前は「神の榮譽」という意味があるようだ。テモテは、家族が「神様の榮譽がある子」という願いを込めて命名したようだ。

「パウロの伝道旅行に同伴」

テモテは、父はギリシャ人だが、母エウニケはユダヤ教からキリスト教に改宗したユダヤ人。祖母ロイスも同じようにキリス

ト教に改宗した信仰の熱い人だったと記されている。たぶんリストラに伝道に来たパウロによって入信し、その後、パウロの弟子として伝道に同伴し続けた。パウロの第2回、第3回の伝道旅行にも加わり、最後のエルサレム旅行にも従った。これは使徒言行録の16章から20章。なお、いわゆる獄中書簡と呼ばれるフィリピ書、コロサイ書、ピレモン書などのパウロの手紙にテモテの名が記されている。

「献身的な奉仕活動」

獄中書簡の中で弟子のテモテの名が記されている。テモテはローマにまでパウロに

従ったことが分かった。テモテはパウロにとって忠実な弟子であり、良き同労者として信頼された献身的な奉仕活動を続けたことで知られている。これはフィリピの第2章19節から24節にその根拠がある。伝説によると、テモテはエフェソ教会の監督となり、最後はパウロと同じように殉教したと伝えられている。

テモテの手紙はテトスの手紙と同様に牧会書簡と呼ばれている。牧会書簡というのは若い伝道者であるテモテやテトス、牧会者とはこういうものであるべきだという勧めが、牧会書簡、きょうのテキストのテモテへの手紙に出てくる。

パウロはテモテに会ったときに最初の印象をテモテへの手紙第1章5節でこう述べている。「そして、あなたが抱いている純真な信仰を思い起こしています。その信仰は、まずあなたの祖母ロイスと母エウニケに宿りましたが、それはあなたにも宿っていると、わたしは確信しています」。

「テモテの信仰を見抜いたパウロ」

純真な信仰とはどういうものをいうのか。それは見せかけではない。偽りでもない。真摯であり、誠実であり、純粹である。そのことを先輩のパウロは若い伝道者、テモテの中に直観的に見抜いたのではないか。そのパウロをしてテモテに見たその純真な信仰は祖母ロイス、母エウニケから伝承されていったものではないか、と考えられる。とりわけ、テモテの父親がギリシャ人であったことは、大きくクローズアップすべきことだと思う。父親がギリシャ人であったことからすると、祖母ロイスも母エウニケも随分気を使ったのではないか。そのこと

が推察される。しかし、ギリシャ人の父を持ちながら祖母ロイス、母エウニケの信仰が続いて宿ったと出ている。

「宿るとは安定・定着の意味」

5節。「その信仰は、まずあなたの祖母ロイスと母エウニケに宿りましたが、それはあなたにも宿っていると、わたしは確信しています」。わたしはというのはパウロだ。「宿る」というのは、聖書ではどういう意味を持っているのか。「安定する」という意味。もう一つは「定着する」という意味を持っているようだ。祖母ロイスと母エウニケから伝わった信仰は、テモテの中にも定着した。安定したものとしてある、とパウロは読み取る。純粹な信仰が二人の姉妹たちに宿ったようにテモテの中にも安定した信仰が定着した。そうパウロは信じ抜いたということだ。

「祖母の突然死に葛藤する孫娘」

きょうは信仰の継承にふさわしいテキストが与えられたと思うが、実は私どもの教会にもこのことがクリスマスに向けて実現をする予定だ。今度12月22日に受洗する20歳の女性は、5年前の祖母の突然死、事故死について、とても15歳の心には受け入れ難い痛みの死だった。不思議なことに、亡くなられた後、その娘であり、受洗予定の孫のお母さんが私どもの教会の幼稚園の庶務の仕事に携わっている。母親がこの仕事に就いたのは祖母の死によって起こった。10月の初めに20歳のこの女性から手紙をいただいた。この5年間、祖母との別れを受け入れることができなかった。5年前に葬儀がこの教会であったが、その

ことがよぎって闘いがあった。

「永遠の朝」

讃美歌伝道がとても大切だと思うのは、そのことが彼女の手記に書かれている。「私はこの5年間、祖母の死を受け入れることで葛藤を続けてきたが、讃美歌575番「球根の中には—死・よみがえり・永遠の命—」の3番に「いのちの終わりは いのちの始め。おそれは信仰に、死は復活に、ついに変えられる 永遠の朝。その日、その時をただ神が知る」とある。この讃美歌を歌いながらこの5年間の激しい葛藤が、ここなんだ。受け入れがたい祖母のその命の終わりは今5年後、私の新しい命に受け継がれるために私は、洗礼を受ける。そのことがはっきりと私にきた手紙に書かれている。

「神様のなさる不思議に感謝」

祖母ロイスと母エウニケの信仰が3代目のテモテに確かな信仰として定着したように、この聖書の箇所を示された後に、1代目、2代目を私は見ていたが、3代目が、このテーマを与えられたその段階で確かなものとして宿った。神様のなさる不思議さに私は感謝している。テモテへの手紙が私たちにそれなりに「誰々への手紙」と書けるそんな一人一人になりたいし、また信仰の後継者で共にありたいなと思って、私どもの教会で起こった事実から皆様にお勧めした次第だ。お祈りさせていただく。

埼玉地区壮年部、信仰の継承について考える集いに埼玉和光教会を会場に開催させていただくその幸いを心から感謝します。司会者も奏楽者も説教者もこの教会から皆さんのご推薦をいただいたことを感謝しま

す。きょう、半日ではありますが、本当に信仰の継承について、教会の課題として、地域へ打って出るその課題として、そして私の家族、私の親族を見つめ直すことのできる半日の集会とさせていただきます。主の御名によって祈ります。

三浦 修 先生のプロフィール

1941年中国天津に生まれる。山口県萩市で育ち、1966年3月、同志社大学大学院修士課程神学研究科(新約学)終了。66年4月~94年3月、鳥取市湖山町の湖山教会牧師・ひかり幼稚園園長、94年4月から埼玉和光教会牧師・小羊幼稚園園長。この間、関東教区議長として2期。教団常議員として1期務められた。現在、関東教区人事委員、埼玉地区アーモンドの会委員を兼任。

開会礼拝 順序

司式:小山 一郎(埼玉和光教会員)

奏楽:山下 恵(同)

献金:田島 章義(春日部教会員)、瀧川市郎(熊谷教会員)、土門 嘉樹(上尾合同教会員)

前奏

讃美歌 412番(昔 主イエスの)

聖書 テモテへの手紙二 1/3~14節

祈祷

説教 「信仰の宿り」

埼玉和光教会牧師 三浦 修先生

祈祷

讃美歌 575番 (球根の中には)

献金

後奏

埼玉地区壮年部研修会 2013年11月17日 埼玉和光教会

「地域に開かれ、共に育つ教会」
「高齢者、障がい者、弱者に寄り添う」
「幼児洗礼、7人の後見人」
「神様の時、カイロスを待つ」
「信仰の継承について考える」



埼玉和光教会牧師 三浦 修 先生

「信仰の継承」をテーマにいただいたときに、私は「教会として」を第一の柱として、続いて教会がどんな形で地域にアプローチしているかについて、特に第5の日曜日の時はお互い講壇交換をするなどして親しくしている所沢みくに教会の最上 光宏牧師からもお話してもらうことにしている。

所沢みくに教会では、地域の老人たちを教会に呼んで教会の女性が対応する。地域の小さい子どもたちを教会に呼んでお母さんたちと子どもたちを教会に受け入れる取り組みを始めた。埼玉和光教会では、教会の中で御年配方のお年寄りの集い、方舟に乗って天国に行こうという70歳以上の方の集いがある。地域の老人を呼んでということろまでは踏み込んでいない。ここは幼稚園があるからたくさん幼児を預かっているが、そうでない地域の幼児たちを呼ぶというのはどういう発想で、どう展開しているのか、参考になると思う。

「教師ではなくスタッフと呼び合う」

それでは教会編から入っていく。ゲラ刷りで今、手に入ったばかりの「教師の友1月号」に特集記事・子どもと教会をつなぐ「子どもたちに神さまの愛を伝えるー幼児教育施設を通して、地域に向かって、教会員の家庭を覚えてー」のテーマで埼玉和光教会の幼稚園教育の様子が紹介されている。私たちの教会と幼稚園が車の両輪のように上手く回転している中に、昔でいう日曜学校、今の教会学校がある。教会学校のスタッフ

会議がある。私たちは先生とは言わない。教師とは呼ばず、共に礼拝を守る立場から「スタッフ」と呼び合っている。教会学校は幼稚科、小学科、ジュニアクラス(中高)・成人科の4つに分かれている。いつの間にか20人のスタッフが出来上がった。

「名誉ある撤退を」

幼稚科は、私は19年前にここに来たが、そのころは園児減で定員200人に対して、70人を切っていた。アップアップの状態

で、その時の理事長が小山 幸次郎さんで、「三浦先生、使命は尽き果てても結構です。あと10年、なんとか予備金があるから、それを使い果たして名誉ある撤退をしましょう」と言われたことが強い印象に残っている。それほどギリ貧の状態になっていましたから。

「賭けに近い日曜保育」

そういう中で日曜日の保育をするということは賭けに近いことだった。ギリ貧であるのに日曜日まで「幼稚園に來い」ということ、内部には二つの意見に分かれた。日曜日は解放してあげた方がいいのでは、自由に。しかし、主任を中心とした現場が「これを譲ったら子羊幼稚園の生命線は断ち切られたのと同じです」。普通、現場というのは「日曜日は楽にしてほしい」というのが現実ではないですか。

「70人弱から125人まで回復」

うちは違った。私も「自由にしてやってほしい」という意見に傾きかけた。現場が主任を中心に「それをやったら、初代園長の白水 万里（しろうず まさと）先生や教職員の初代の思いはどうなるのか」と現場が言ってくれたので、それで持ちこたえて今、125人まで何とか回復してきている。でも定員は200から175まで落としているから、それでも50ほど足りない。でももうしばらくいけそうじゃないかなという感じで、それは幼稚科が頑張ってくれているからだ。

「父親も教会幼稚園へ」

幼稚園のお父さん方も、「子どもとお母さ

んが教会に行くのはいいが、自分たちが教会は」という思う部分があるが、「お父さん方も來なさい」という日が年に何回かはある。お父さん方は幼稚園の参観なら来ることはあるが、1部は礼拝を済まさないで幼稚園に行けないシステムになっている。

「4月からは園長から校長へ」

「一部礼拝をしてから保育を見に行きなさい」と言っている。お父さんたちも否応なく、出ていただくようなシステムを取っている。私は園長であり、卒園式の時にこう言う。「今日まで私は皆さんの園長先生でしたが、4月1日からは校長先生だ。教会学校の校長先生として待っています」と切り替えをしている。それが小学科につながってくる。皆さんにお話ししたいのは、うちは成人科という独特のものがある。

「ギリ貧の原因」

ここは園バスがない。給食もない。何もないのが有名で、ギリ貧になった原因はそこにあるのだが、その分、日曜保育をするということだから親は送ってこなければならぬわけだ。送り迎えも。普通の保育は午前9時から午後2時までだが、日曜日の場合は1時間だけ。送って行って帰宅しても1時間後には迎えにいかなくてはならない。そこが狙いどころだった。

「保護者対象の成人科」

この1時間を利用しようと、幼稚園のホールで成人科をやる。成人科は教会学校の延長線上の大人クラスだ。そこにスタッフが今、5人いる。そこで聖書日課の説き起こしで礼拝をする。成人科ができた理由だ。

最近の受洗者はこの成人科からが多い。保護者としてきていた人がじーと聞いていて何らかの内なる変化を起こしていくのかな。

「ピアノ弾けるママ、素早く採用」

ピアノやオルガンが弾ける人は、スタッフの成人科長さんが素早く採用するのだ。普通、教会の礼拝だったらなかなかそうはいかない。教会学校の成人科だったらそこは「いいじゃない」となる。そのことの中から、そうした奏楽をしながら受洗者が誕生する。聞きながら受洗者が誕生する。このシステムは、付属施設のある教会の皆様にはとりあえず報告のできる事柄だ。

「成人科は第1礼拝」

成人科の礼拝は日曜日という第一礼拝ではないか。主日礼拝が第二礼拝になって、第一礼拝にも大きな力を入れている。幼稚科、小学科、ジュニア科があるからこそ成人科がある。成人科から受洗者、転入会者が生まれている。神様のはからいの不思議さを思わずにはいられない。

ここで少し教会案内をしたい。私どもの教会は1946年5月12日に創設された。ここは戦後、米軍の進駐の一番の大きな基地だった。非常に風紀も乱れて世にいう婦女子のリスクがあった、その中で初代牧師・園長だった白水 万里先生は、賀川 豊彦先生の弟子でもあったが、賀川先生が「白水、埼玉の和光というところに行かないか」という話があり、白水先生はそれまで大きな教会を牧会していたこともあり、最後のエネルギーを開拓伝道に使いたいということで、ここに来た。ここには教会があったわけではない。ただ軍需工場の寮があって、

敗戦で従業員がいなくなり、その1室を借りて礼拝を始めたのが1946年（昭和21年）のその日だった。以来67年の歴史を刻んでいる。私が来た19年前は木造だった。その当時の主事と私が、雨が降ったらバケツを持って走るくらい、雨漏りがするとか、シロアリに食われるとか、いろいろ大変だった。それが1999年9月11日に今のような教会堂の落成を見た。

「70歳以上対象の方舟の会」

集会は、主日礼拝、教会学校、聖書の学びと祈りの会（水曜日の朝と夜）、キリスト教を学ぶ会が第2金曜日、午前10時、キリスト教入門講座が第3火曜日午前10時、諏訪原家庭集会在が第4金曜日の午後1時半、教会の70歳以上の方々の集いである方舟の会が第3金曜日の午前10時半という具合だ。10時半から11時まで牧師が出席し、聖書の日毎の糧を学び、11時から正午まではご年配の方々の「方舟の会」の自由な語らいの時、お昼になったら牧師と一緒に会食をする。

「ハワイに行こう、という話も」

会食というのは良いですね。難しいお話もいいが、やはり一緒に食べるというのは初代教会から愛餐会が持たれていたということにも由来する。日ごろ教会でおとなしく、ひっそりしていた方々が生き生きとしてくる。12月にはクリスマスのころ、レストランに食べに出かける。ハワイに行こうという話もあった。本当かいな…、頓挫したが、そういうことで元気が出てくるというのが方舟の会だ。

それから各会、各部部会というものもそう

いう風にやっている。「心の泉会」、ここでは埼玉心の泉会のベースチャーチになっている。調べたら以前は全国で40あった。今は15ぐらいになって定期的に定例集会をやっているのは埼玉だけだ。こういう集会を本気で受けていくということは私どもは当たり前だと思っているが、一般的にはなかなか難しいなと感じている。



信仰の継承を考える集い

これもお伝えしたいことなのだが、教会や幼稚園が手を出せなかった、幼稚園の保護者の会が自主的に聖書を学ぼうということでこの春から始まった。5人の世話人がいる。3人が私どもの教会員で、他の2人は幼稚園を出て他教派の方であっても世話人になって下さって、一般のお母さんたち、「教会に行くのはまだ、ちょっとね」とか、教会では「質問ができる雰囲気もないのに」というお母さんたちが集まって来る会だ。初めは7~8人で始めたものがこの10月には18人も集まった。これから楽しみのかとして育てていきたいと思っている。

「礼拝後のティータイム」

埼玉和光教会の取り組みとして次に申し上げたいのは、第二主日礼拝後に先週、始

めたばかりの「信徒・求道者・新来会者の交わり」(午前11時半から正午まで)、「礼拝後のティータイム」(無料)がある。礼拝出席者のほとんどの人が残り、この通路にお茶とお菓子を出して好評だった。

「どこの教会も忙しすぎる」

皆さんの教会もそうだと思うが、礼拝が終わった後はどこも忙しすぎるんですよ、教会は。うちでいうと、第1日曜日は役員会、聖歌隊、第2日曜日は各会例会、第3は教会学校部会、第4は各部部会など、とにかく、なんやかんやでみんなが集まることができない教会だった。やろうと言っても数回ぐらいで頓挫しちゃったりしたが、今回は至上命令を下し、先日は10時半から11時半までを讃美歌何分、お祈り何分、献金何分と、全部計算し、成功した。時間的にね。「そこまでやるのはどうか」という人もいたが、とにかくやらなきゃいけないということで、これは大成功した。これから毎月第2日曜日の礼拝後は各部集会などは12時以降はしてもいいが、11時半から12時までではしてはいけないという確認が取れると思う。大成功だった。これからも続くと思う。

「突然、カネを返せ」

「完全実施」というのと「無料」というのには意味がある。それはある台湾のご婦人が熱心に教会に来ておられて一生懸命献金もなされていた。ところが突然「お金を返せ」と言われた。「うそっ」と思うようなことが起こった。一生懸命献金をしているのに、うちは「和光うどん」というのがあって300円取っている。「あの300円は

なんだ」と、言われた。私どもとしては当たり前だと思っていたことが、そうではなかった。台湾や韓国の教会は献金を一生懸命捧げていて、私が行った韓国の教会でも礼拝が終わったら食事会があり、すべて無料だと、ハングルが分かる人が教えてくれた。「一生懸命献金した上に、なんで300円取るんだ」という言い方だった。結局、全額返す結果になった。それほど怒りましたね。「日本の教会はそれほどみみっちいのか」ってね。一生懸命献金していることについて見つめ直してほしいと言われた。

「無料でいきますよ」

特殊な例かもしれないが、「無料」と書いたのはこういう意味があった。「無料でいきますよ」。その日、お金に余裕がない人もいるかもしれないから第2日曜日の30分間は、お茶も飲め、それなりにつまめて、お金を徴収しないということがあってもいいのではないかということになった。台湾の女性の件で主事と私が本当にどうしようもない立ち往生した事件から来たアイデアであった。

「若者伝道への取り組み」

今年の6月29日に教団で「十代を信仰へと導くセミナー」があった。そのときのテキストがこれだ。その中で、私はそこまではできないなと思うことも含めて各教会が今から若者伝道に本気で取り組まないといけないという意味は伝わってきた。

続いて「地域編」に入る。その中に所沢みくに教会を入れた。私はここにきて19年になるが、前任地は鳥取の農村地開拓の伝道からスタートして28年間、そこで開

拓伝道をしていた。

「もう5年で降参、ダメだ」

純農村地帯で、行けども行けどもただ砂原という、鳥取砂丘の一角で、水をやっても、それがしみ込んで芽が出ない開拓伝道で、「もう5年で降参、ダメだ」。私はベースが京都で、京都に行ってもどこか転任の場所でも探してもらおうかなと、私は「八重の桜」の学校(同志社大学)ですから。ところが、その時に曹洞宗の松本 尊仁(そんじん)という僧侶と付き合いがあった。

「牧師さんは転勤サラリーマン」

そしたら松本住職は「私は住職をしているが、あなた方牧師さんは、〃転勤サラリーマン〃、ですね」と言った。「我々は住職です」とおっしゃった。何を言っているか分からなかった。「私たち住職はその町や村に住み続けることが仕事だ」と言った。それが住職じゃないですか。あなた方牧師は転勤サラリーマンと言われた。私はそこで辞めようと思っていた時に言われたものだから、それから一念発起で28年頑張った。

「その町の証人、奉仕者に」

今は和光の地に転勤してきたが、私はそのことから皆さんにも「その町の住民になってほしい」と、ただ住民で会社に行って、教会に行ってということではなしに、その町で「証人(あかしびと)」、「奉仕者」になる。「あなたの仕える姿勢は、背景にキリスト教があるのですか」とか、「クリスチャンなんですか」ということが分かればそれで結構だと思う。8月26日、埼玉最寄2区の教師会で志木教会に行ったときに、坂戸

いずみ教会の山岡 創（はじめ）先生が、こんなことを言い始めた。「実は先生方、坂戸でキリスト教関係の集会場、大きい会場を確保しようと世話人になって、本当はキリスト教集会ですと言って、坂戸教会牧師の山岡 創ですと言うべきだったのに、キリスト教だと言ったり、牧師だと言ったりしたら貸してもらえないのではないかと思ひ、山岡 創で通して借りた」と話された。

「後悔の念」

その時、自分はたとえ断られても何故、教会の牧師という形で借りなかつたという後悔の念が生じた。以後、坂戸教会牧師山岡 創という名前で借りることにしたと宣言された。実は私もそれに準じたことが起こった。ある信徒が交通事故に遭った。自転車で浦和駅の方に行こうとしたときに軽トラックに跳ね飛ばされて瀕死の重傷を負った。9月21日だった。夜、ご家族から電話があり、次の日曜日に礼拝が終わってから病院に駆け付けた。病院の受付で「あなた様はどなたですか」と聞いてきた。

「初めから牧師とは言えなかつた」

瀕死の重傷で家族しか入れないと分かっているから「身内の者です」と言った。そしたら「あの方のご主人ですか」という言葉が返ってきた。山岡先生と同じで、私も初めから牧師とはいえなかつた。「身内ではありません」と言ったら、「あなたはどちら様ですか」と聞いてきたから、「私はこの姉妹の所属する教会牧師の三浦と申します」と言ったら、30分くらいたって入れてくれた。本人とお会いした。続いて1週間後

に行つたときに、受付にまたその人がいて「ああ、あの時の牧師さんですか」と言った。「すごいな」と思った。むこうにも牧師という新鮮なイメージがあつたのだろう。「ああ、あの時の牧師さんですか。よく来てあげて下さいました」と言った。

「土曜日は教会の玄関で掃除」

その意味では私は町の証人について、どんなことを頑張っているかという、毎週土曜日には教会の玄関で掃除をしています。住民との接触になるから意識的にやっている。それから和光市の教育や保育行政で一生懸命行ってそれなりのご奉仕をしていたところ、この夏、市の教育長が表彰してあげるといふこともあつた。その意味では牧師はその町の住職、皆さんにはその住民になってほしい。「仕える場」というのはいっぱいあるのではないか。

「地域に打つて出る」

教会としては、特別伝道集会、教育講演会、小羊コンサート、わいわいまつりなどで、教会は地域に打つて出ている。特別伝道集会はたまたま、今日あつた。きょう、山谷兄弟の家伝道所、まりあ食堂責任者で、牧師の菊池 譲先生をお迎えした。礼拝は牧師を入れて4人でやっているのだという。もう一人は39歳の方だとおっしゃっていた。ホームレスの方々にとってこの山谷兄弟の家伝道所がなければならぬし、まりあ食堂がなければいけないということをお話になられた。ちょっと気になつて「先生、お年いくつですか」と聞いた。そしたら1946年とおっしゃつた。齢以上に老けておられた。自己鍛錬をしてこれ

からも、あと十何年もつかも分からないが、あの町にあの教会、あの食堂の存在が不可欠だと力強くお話しされた。埼玉和光教会としても山谷兄弟伝道所とは数十年来の関係を続けている。

「45年間支え、連帯」

このほか、この教会として和光市心身障がい児・者を守る会との連帯をしている。この教会が45年間お付き合いをしている。最初からこの教会を会場として事務所にしてこの会が立ち上がって、いまだにこの教会が会の大きな支えであると、この代表の方がおっしゃっていた。「45年間支えてくれた埼玉和光教会に感謝します」と、11月10日の会のメッセージだった。これ以外にもケニアのスラムに仕えておられるキューナ教会に連帯している。スラムのお母さん方が作られたグッズをお預かりをして販売するとか、菊地先生にもきょう、教えられたが、世の力あるものの社会の底辺にある人たちを見落とす、そのことはイエス様の御心ではない。イエス様の教えではない、とはっきりと言われた。私たちの教会が的を外してはいけない部分があることをきょうの特別伝道集会でも教えられた。

地域への活動としては明日、教育講演会を予定。つい先日11月15日には、紫園かおりさんというフルートの第一人者のコンサートがあった。

「わいわいまつり」

わいわいまつりは、3つのスローガンを掲げている。第1のスローガンは教会と幼稚園がこの町に存在することを知らしめる、世にいう大バザーだ。通称でわいわいまつ

りという。地域の人にこの礼拝堂に入ってもらおう。終わった後はほこりまみれになって大変だが、毎年10月第4土曜日にやっている。第2のスローガンは、同じ屋根の下に、幼稚園と教会の関係者の出会う場所を目指す。第3は利潤を目的としない—を掲げて、わいわいまつりというイベントを開催している。

「所沢みくに教会の取り組み」

地域への取り組みとしてのプレゼンテーションについて、きょうは所沢みくに教会牧師の最上 光宏先生にも特別スピーチをお願いしている。乳幼児と母親との集い、地域のご年配の人たちとの交わりについて、最上先生、どうぞ。



「皆さん、こんにちは。所沢みくに教会が取り組んでいる二つの企画についてご説明させていただきます。

「地域あつての教会」

基本的に私の考えは、教会は地域に開かれたものでなければならない。地域と共に

育つというか、地域あつての教会だと思っている。

「30年間、あちこち転々」

所沢みに教会は創設43年になる。ずーと定まった場所がなく、30年間ほど公民館を借りたり、借家をしたりしてあちこち転々としていた。15年ほど前に今の土地が与えられて、ある方の寄贈だが、それによって今の西住吉という現在地に教会が移った。所沢に場所が定まって15年ほどしかたっていないということもあって地域に開かれた教会として地域に定着することが、教会の大きな課題でもあった。

「ティーアワー」

どうしたら教会が地域に仕えることができるか、いろいろ模索していく中で、その一つはティーアワーを毎月1回、第2土曜日に設けることにした午後2時から4時まで2時間、コーヒーを入れ、またおいしい手作りのケーキを作って皆さんに食べていただく。会費100円をいただいて、地域の方々に来てもらおうと、チラシをまいたりしてきた。しかし、これはなかなか定着しなかったが、3年ほど前から教会員の一人の婦人が町で80歳以上の年配の婦人たちが集まってカラオケを歌ったり、親しいグループがあつて、そこに声をかけ、こういうことを教会でやっているからお茶を飲みに来ませんかと声を掛けたところが、そういう場所があるならと十数人の高齢の婦人たちが来るようになった。

「教会歌声喫茶」

ティーアワーは、高齢の方々の親しい集

まりの場になっている。特別に教会が何かを企画するというのではなく、おいしいコーヒーを点て、手作りケーキを出して場所を提供する。年配の人たちが互いに集まって、いろいろ健康のことだとか、世間話だとか、そんなことを話し合つて最後の30分ほどを歌声喫茶ではないが、教会で音楽の先生をしていた年配の方が指導して季節季節の童謡を歌うことをしている。これはカラオケ大好きのおばちゃんたちだから声を張り上げて歌うなど大変喜ばれている。

「幼児と母親の集い」

もう一つは、「幼児と母親の集い」で、3~4年前から始まった。教会員の中に小さいお子さんを抱えたお母さんたちが、3人、4人ときていた。もともとはそういう人たちのニーズに応じて、教会の空いている日を、最初は毎週火曜日に行っていたが、子どもたちと一緒にやってくる子どもたちを遊ばせながらお母さん同士がいろいろ育児上の悩みを語り合う。そういう場を提供した。後の30分をお茶を飲みながら手作りのケーキを食べ、雑談をして帰るというささやかなものだが、これが近所の方々にも知れ渡つて最近は10家族くらい見えて、お母さん同士は育児の悩みを語り合い、子どもたちは礼拝堂にマットを敷いて自由に遊んで子どもたち同士も仲良くなる。

「平日、教会堂を開放」

これは私の娘がニュージーランドに行っていて、私がニュージーランドを訪れた時に、ここの教会がウイークデーを利用して空いている会堂をいろいろな形で開放している。その一つに今やっているような小さ

いお子さんを抱えたお母さんたちが子供と共に集まって、子どもを遊ばせながらお母さん同士が語り合うというのを実際に見てきたものだから、これならできると思い、取り入れた。開かれた教会として地域のニーズに応えながら地域と共に成長していくような教会でありたいと願っている。施設を通して結びつくという接点をいろいろな形で補っていきたいと思っている。ありがとうございました。

「ある日、ある時、教会に行こう」

今の最上先生のお話は、どの教会でも取り入れていける可能性があるように思う。直接教会に来ておられなくとも、地域の人たちが教会の建物の中に入るといことは、ある日、ある時、「教会に行こう」というきっかけにもなる。若いお母さん方、ご年配の方々だって、召される時、「やっぱり、あの教会で」となるかもしれないしね。

「ゴスペル演歌」

ここで一息抜く形で、演歌を聴くことにしたい。私は演歌が好きで、韓国でのカラオケで100点を2回も出した経験がある。「くちなしの花」と「上を向いて歩こう」が好きだ。そしたら奏楽者の山下 恵さんが、ある日、「ゴスペル演歌」を紹介してくれた。それを聴くことにする。

—録音鑑賞、歌詞省略—

「イエス様の生涯を演歌で」

最初聴いて「ジェジェッ」という感じだったが、イエス様の生涯を真面目に歌っている。こういうアプローチの仕方も「あるのかな」と思った。中身が「超真面目、な

んですよ。クラシックとか、こうしたゴスペルもこれから起こりうるものなのかなと思った。

ここで、昨年刊行されたマーク・R・マリンス上智大学教授の著書「メイド・イン・ジャパンのキリスト教」(トランスビュー)取り上げてみたい。日本のキリスト教徒が人口の1%を超えない理由として、よくキリスト教はバタ臭い、土着されていないからだと説明される。日本のキリスト教の土着化について調べている宗教学者のようだ。イエスの御霊教会とか、内村 鑑三の無教会主義に触れている。その中で、「キリスト教に限らず、世界宗教が発展するには単に日本化するだけでは足りないこと、日本人も時代によって信仰の形態が変わることに目配りする必要があるということだろうか。」と指摘している。その意味ではゴスペル演歌は取り組みのその一つかなと思った。

「キリスト者が1%を超えない理由」

日本人のキリスト教受容を永年にわたって論じてきた神学者の古屋 安雄聖学院大学教授は、著書「キリスト教と日本人」(教文館)で、「日本のクリスチャンが1%を超えない理由は、明治以降、旧武士=知識階級がキリスト教と結びついたために、庶民との間にギャップができた。欧米の神学を絶対視し、インテリが量より質だと威張っていたことが、増えなかった理由の一つ。韓国では今や人口の4分の1(三浦は3分の1に近づいていると聞いている)、中国も5~10%がキリスト教徒といわれる。韓国や中国は、まず庶民から広がっていったために着実に増えている」と指摘している。さらに古屋氏は「福音というのは本来グッ

ド・ニュースを意味する。うれしい知らせだから、お祝いに近い。ところが日本の教会の多くは暗く、堅苦しく、まるでお葬式になっている」と解説する。

「笑顔があふれた礼拝」

私は「信徒の友」の「日毎の糧」を毎日丁寧に傾聴しているが、今年9月号の10日のところで、執筆者の宮本 義弘沼津教会牧師は「私たちの教会の礼拝は、いつも笑顔であふれています。キリストを喜ぶ笑顔がそこにあります」と、書いている。私も講壇から今日も見ていたがここまではないですね。笑うことは不謹慎とってしまうのか。でも、この先生は自分の説教、メッセージに笑顔のリアクション、反応があることを大切にされておられる。15日のところで、「今日は日曜日です。礼拝に出る前に心を静めて、自分が少しでもその愛に応えて歩めるようにと祈ってから教会に出掛けましょう」と記している。沼津教会の信徒さんがこのようにしていることは牧師にとって励みになると言っている。

「きょうもお土産ありがとう」

実はこの秋に私の叔母が、京都洛西教会で亡くなり、葬儀に行ってきた。その時、葬儀を担当した牧師が涙ながらに葬儀の式辞を話された。それは近藤 ふみえという叔母が「私にこう言ってくれました。先生、きょうもお土産ありがとう。そういわれたのですよ」。私は最初、お土産の意味が分からなかった。葬儀を担当した牧師は「このお土産を近藤さんは私の説教だ」と言ってくれた。私が説教を終わり、玄関の前に立っていると、「先生、きょうもお土産(説教)

ありがとう。このお土産をいただいて私は家に帰ります」。私は叔母が牧師をこうして支えていたことを知らされた。この9月のことだった。

「家族・親族編」

最後に、家族・親族編に入っていきたい。今年のイースター、3月21日だったが、本教会で10月31日に満1歳になられた方の幼児洗礼が執行された。生後数か月の赤ちゃんだったが、この子の母親が突然死をなされたことから、生まれて数か月の赤ちゃんのお母さんがいなくなった。その姉さんがうちの教会員で、数年前に受洗されたばかりだが、自分の妹の突然死で残された数か月の赤ちゃんを引き取られた。

「幼児洗礼を志願」

亡くなった妹の信仰、そして母親代わりになった私の信仰を通して幼児受洗を志願してこられて、3月31日のイースターで洗礼を執行した。皆さんの教会でも幼児洗礼はあると思うが、これがどれほど信仰告白という形で実っているか。これが今、日本の教会の課題だと思っている。幼児受洗の志願があつたら教会は受けますよ。だけど、その後がどうなるか。

インドネシアは回教国だ。スラウェッシュ州だけはキリスト教だ。本土は全部回教徒でないと、首長や議員になれないが、スラウェッシュ州はキリスト教徒でないと成れない。私が関東教区議長を4年させていただいたときに、交流の中で、そのミナハサ教会で説教をさせていただいたことがある。洗礼式に参列した時の感動的なお話をしたい。

両親が幼子を抱いて幼児洗礼を受けた。でも、その周りに7人の信徒が付いていた。7の数字には意味があった。今思うとね。お母さんとお父さんだけではね。責任を持ってない部分があるじゃないですか。

「親はグーの根も出ない」

こんなことがある。「幼児洗礼、自分の意志で受けたわけではない」「あれは両親がしたことでは責任がない」と言われたら親はグーの根も出ない。その時の場合をインドネシアのミナハサ教会は考えた。7人の後見人を立てた。この人たちが幼子の成長の都度、都度、両親の代わりに相談に乗る。私はこの制度を日本の教会も取り入れてほしいな。そういいながら私どもの教会も今回、7人の後見人を立てることができなかった。その方に言っています。「私(三浦)が責任取ります」。その方の赤ちゃんは今、1歳。「信仰告白の時はぜひ呼んでください」と言ったが、信仰告白が何年後になるかは私には分からない。主に委ねます。

「幼児洗礼、教会の責任」

幼児洗礼を施した教会はそれぐらい責任がある。両親だけでは責任を持ってない部分がある。ここでぜひ提言したい。これから教会で幼児洗礼があったら教会の役員の何人かでもいい。その場合、年配者はダメ。幼児洗礼ですから信仰告白式を迎えた時に立ち会える若い中堅の後見人を選んでほしい。7人とは意味がある数字だと思う。

「皆さんへのきょうのお土産」

きょう、皆さんのお土産としてこれを持ち帰ってほしい。日本の教会はそれほど実

がなっていないのだ。1%が増えないと言っている。信仰の寿命は3年と古屋先生は言っている。多くの人たちは受洗して3年で冷めて辞めていく。

「3年リタイア説」

「3年リタイア説」が現実に数字が出ている。日本のクリスチャン人口は伸びない。横ばいか、下がっている。後に数はあってもいいが、初めからは数を意識していない。するだけのことをしたらあとは神様の時、「カイロスを待つ」というのが私の姿勢だ。

最後に私の姉のことを申し上げたい。実は5月12日は私どもの教会の創立記念日で、墓前礼拝をやる。私の姉は5年前に交通事故で歩行が困難になり、「修君、私は埼玉和光教会は好きだが、もう行くことができない。歩けない」と言った。ところが今年に限って夫と一緒に歩いてきた。

「その日、その時、神が知る」

この墓前礼拝で讃美歌575番を歌った。彼女は1番、2番、3番の最後の歌詞を「自分に神様から言われたように思った」と話した。「その日、その時、神が知る」。「私のことを知っているのは神様なのだ」「神様から迫られた」と語った。今年のクリスマスに西宮の香栢園教会で受洗する予定が、食道がん、肝臓がんの疑いが出てこのクリスマスには入院、手術ということで、イースターに延ばすということが、おとといの電話で確認した。家族のことを思ったらその実現は難しいもの。特に身内というのは。スイスイいっているクリスチャン家庭はそうないと思う。やはり闘いがある家庭。牧師というのはその最たるものだ。でも私は

長男と次男がいる。朝に夜に魂の救いのために祈っている。もちろん教会のこと、埼玉地区のこと、関東教区のこと、教団のことも祈っている。

「あきらめてはいけない」

皆さん、信仰の継承というのは教会としても難しいところがあるし、家族にしても難しいところがあるが、そこをあきらめてはいけない。思い続けて、思い続けて、祈り続けて、祈り続けたその最後は神様の時なのです。私ども人間の時というのはギリシャ語でクロノスと言うが、人間の時が先行する。でも、必ず神様の時、カイロスがあることを信じてね。そのことを待とうじゃありませんか。埼玉地区の壮年部が先頭に立ってそのことを実行していったらどうでしょうか。祈らせていただく。

「祈り」

神様、埼玉地区の壮年部からこの教会でご使命をいただいた僕（しもべ）です。司会者、奏楽者、また最上先生のお助けをいただき、任務の一端を果たすことが許され、心から感謝します。どうぞ埼玉地区の壮年部を通し、その婦人部にも青年部にも大きな証や影響がこれからもなされ続けていくことができますように。この日、この時を心から感謝し、この祈り、私たちの主イエス・キリストの御名を通して御前に御捧げ致します。アーメン。

「信仰継承を考える」分団協議のまとめ

「何が悪かったのか、嘆きと反省の言葉」

「主の導きに信頼と希望を持つ」「教会全体で支える」

講演が長引き、自己紹介に加えて実質協議は30～40分。佳境に入る手前で時間切れ。地域社会への福音伝道と、家族に信仰を伝えることの2つに話題は集中したが、特に家族に対する信仰継承の問題などはプライベートで微妙な感情的機微を抱えているだけに話しにくそうな雰囲気があった。ある高齢の方が身内への伝道・信仰の継承は信仰に入った当時からの数十年続く課題だが容易になされない。子どもたちを教会学校で育てたが、信仰は持たなかった。何が悪かったのか、分からない、としみじみ語られた嘆きと反省の言葉がそれを代表していた。仕事と教会の奉仕に忙しく家庭を顧みなかった。子どもを教会から遠ざけた間接的なしっぺ返し。夫婦とも教会員で熱心に教会活動に励んでいるが、思うようにいかない。でも、主の導きを信じて希望を持ち続けていきたい。幼児洗礼を受けさせたが、信仰告白には至っていない。「7人の後見人」の話は参考になった。両親だけではダメ。教会全体が支えるべきだ。今の若い人たちは神や信仰についてどう考えているのかわからない。若い人たちのために今後も頑張りたいという決意表明もあった。

；「私が考える信仰継承」

「聖書に見る信仰継承の系譜」

「私の信仰継承第1、第2号は妻と次女」

「今、YMCAに情熱!!」



上尾合同教会員 上松 寛茂

聖書が継承の系譜をたどってみよう。まず、新約聖書、マタイによる福音書第1章1節以下。「アブラハムの子ダビデの子、イエス・キリストの系図。アブラハムはイサクをもうけ、イサクはヤコブを、ヤコブはユダとその兄弟たちを、ユダは...」。延々と16節まで続く。そして17節「こうして全部合わせると、アブラハムからダビデまで14代、ダビデからバビロンへの移住まで14代、バビロンへ移されてからキリストまでが14代である。さらに18節では、「イエス・キリストの誕生の次第は次のようであった」と記され、「母マリアはヨセフと婚約...」と続く。

「超有名人もいれば無名の人も」

この中にはアブラハム、イサクをはじめ、ヤコブ、ダビデ、ソロモンなど偉大なる超有名人もいれば無名の人もいる。

旧約聖書ではどうか。当然、創世記。神話、伝説の時代の信仰継承の世界を紐解くことになる。ヤーウエの神による天地創造

の後、アダムが誕生、伴侶の妻、エバを得てエデンの園に住む。そこは楽園であったが、蛇を通じてエバにそそのかされたアダムが、神から固く命じられた禁断の木の実を食べて、エバにも分け与えて二人は楽園を追放となり、労働を課せられ、カインとアベルの2人の子を設ける。しかし、神に捧げた収穫物をめぐってカインの物は無視され、アベルの物だけを神が受け取ったため、兄のカインは弟のアベルを妬んで殺害してしまう。

「ノアの方舟」

アダムとエバの子セツの子孫で600歳になったノアは、神の言いつけを忠実に守り、神の命じた通りの方舟をつくり、40日40夜の雨による大洪水で人類の滅亡からノア一家だけが生き延びた。ノアの息子セム、ハム、ヤフェトの3人とその妻たちはノアに従った。

「待望の息子イサクの誕生」

ノアの息子セムから9代目がテラで、ユーフラテス川下流のメソポタミア文明で栄えたウルに住む遊牧民だった。その息子が10代目のアブラハム。75歳の高齢の時、「わたしの示す地へ行け」という神の召命を受け、カナン(イスラエル)に向かう。約束の地だったここも飢饉が起こり、アブラハムはエジプトに逃れた。そこでアブラハム99歳、妻のサラが90歳の時、待望の息子イサクが誕生する。

「感動的な名場面」

健やかに育ったイサクだったが「山へ連れて行き、焼いて捧げものとしなさい」という神の命令で、アブラハムは最愛の息子イサクに斧で切り付けるが最終的に神に止められる。アブラハムのすさまじい信仰心を見せつける感動的な名場面だ。イサクは父アブラハムの信仰を忠実に継承する。

イサクと妻リベカの間にはエサウとヤコブの双子の兄弟が生まれるが、相続をめぐる兄弟はいがみ合い、離反する。ヤコブの息子ヨセフはヤコブに溺愛され、甘やかされて傲慢になり、異母兄弟によって通りがかった隊商に売り飛ばされ、奴隷となる不運に見舞われるが、自分の知恵と才能で破格の出世を遂げ、飢饉で食糧を求めてエジプトにやってきた兄弟たちと再会、和解し、ヤコブの12人の子どもたちはイスラエルの12部族の祖となった。

「民族大移動の総指揮官」

ヨセフの時代から300年、誕生にまつわる数奇な運命をたどったモーセが登場。「エジプトで迫害されているイスラエル人を助け出し、乳と蜜の流れる土地へ導くのだ」という神の召命を受け、エジプトを脱出、民族大移動の総指揮官として「荒野の40年」を経て、約束の地「カナン」を踏み直前、ヨシュアに全権を委譲、120歳の生涯を閉じる。ヨシュアはその信仰を継承し、イスラエルの民を率いてカナンの地に定着する。

信仰継承では、姑と嫁のナオミ、ルツの関係を温かく美しく描いたルツ記や神に背き、嫉妬に狂って破滅への道をたどったイスラエルの初代サウル王の物語、サウルに仕えた豎琴の名手、百戦錬磨で英雄となったダビデはサウルに嫉妬され、また、部下のウリヤの妻バト・シェバを奪い、ウリヤを戦死させる不義と殺人を繰り返す。ダビデとバト・シェバの子ソロモンの栄華の物語などが続くが、女に心を惑わされたソロモンは神に背き、その子4代目の王、レハブアムの時代にイスラエルはユダ王国とイスラエル王国との南北に分裂、やがて「バビロン捕囚」へとつながる。さらに圧巻はヨブ記。詳述はしまい。度重なる不幸にも最後の最後まで神を信頼して揺るがないヨブの信仰に圧倒される。

「信仰継承を考えるカギ」

長々と聖書物語を書き連ねてきたが、これは行数稼ぎでも穴埋めでもない。ここにこそ信仰継承を考えるカギがあるように思えるのだ。世代間、交互に善人と悪人が登場、どこまでも神を信じ貫き通した偉大なる信仰者と大悪人、落ちこぼれもいる。人間の心に潜む妬み嫉み、陰謀、悪意が渦巻く壮絶な人間の裏面の歴史、ドラマが描かれている。人間の弱さ、はかなさに決して目をそらしてはいない。それらをすべてひっくるめて神様はこれを受けとめ、人間を愛し、どこまでも見捨てない愛のまなざしこそが、信仰の継承が私たちの間でも可能だと思わせるパワーを秘めているように思えてならないのだ。

「1人称から2人称、3人称へ」

信仰の継承とは何か。それは1人称から2人称へ、そして3人称へ。つまり私からあなた、即ち夫、妻、子どもたちであり、私から友人、知り合い、そして不特定多数へと継承される信仰こそが定義されるべきものだ。教会から不特定多数へと受け継がれる信仰、世代から世代へと継承される信仰は大枠でとらえれば継承と言えなくもないが、それは「伝道」という定義のジャンルと捉えたい。単なる伝道と継承とは区別して考えるべきだ。

「親の背中を見て子は育つ」

信仰の継承を狭義に解釈すれば家族伝道のことだ。これくらい困難でしんどいものはない。「親の背中を見て子は育つ」と言われる。親がしっかりした信仰を持たない限り、良き証し人でなければ子には偽物の信仰にしか映らない。夫婦の間も同じ。

外出先では心の内を隠せても家の中では無理というもの。生身の人間の身内の付き合いに遠慮や配慮はない。しかし、「それを言っちゃあ、おしめえよ」ってなことになる。

「なぜ消えた証し会」

昔は教会の集会で「証し会」というプログラムが盛んだった時期がある。神様を信じるようになって「こんなにも幸せになった」「こんな恵みに満たされている」「祈りがかなえられた」という言葉が信者たちから異口同音に発せられるのだ。いつの間にか「証し会」という会合自体が完全に消えてしまった。どうしてだろう。ふと、そう思うのだ。

証し会で語る内容は、取りも直さず自らに起きた外的、内的な出来事や心のありようを信仰とのかかわりの中で関連づけて披瀝されるものだから、そこに喜びや感謝がなければ語りたくとも語れない。中高生のころ、先輩の信仰者の証しを胸をときめかせながら聴いたものだった。そうしてます

ますキリスト教の世界に引き込まれ、聖書に親しみ、信仰にのめり込んでいった記憶が今、蘇ってくる。

「リバイバルの原動力」

これが戦後のキリスト教の一時期、リバイバルの原動力になったのではないか。まさに波紋のように信仰継承の波が広がった歴史の事実は歴然としてある。世界的伝道者で事業家、社会運動家でもあった賀川豊彦の講演会などは会場が教会ではなく、市民会館など全国どこの公的施設でも聴衆があふれかえった。敗戦による国民の精神的空白状況や貧しかった時代的背景があるにせよ、そうした様子を今生きている若い人たちは信じられるだろうか。

「失った感謝と喜びの心」

それは喜びや感謝する心を失ったからに他ならないような気がする。こんなにも幸せなのにそう思わない。飽食の時代であって空腹を味わったことがない。いくら食べても満たされない。満腹はしても心は豊かにならない。いくら生活水準が向上しても喜びにつながらない。満足しない。さらに求める。その上を求めて飽き足りない。そうした現実の中で感謝する心は育たない。かつてはちょっとしたことに心底うれしさがこみ上げ、感謝の気持ちがわいてきた自分の過去の姿を思い出す。重い病の床につ

いてこれまでなんとも思わなかった健康な日々が、この時に及んでどれだけ喜びと感謝の日々であったかを思い知らされるのだ。もっと幸せにという貪欲なまでのいじましい自分の心の姿を見るようだ。

「信徒同士の静かな語らいの時」

礼拝と同時に「証し会」に代わる信徒同士の交わりも信仰の継承にはとても大切なひとときなのだが今、教会で本音を語れなくなっている。表面的な付き合いだけでは本当の意味での神との信仰的交わりは深まらない。それだけ教会自体が世俗に近づきすぎ、忙しくなっている現実がある。その意味では「デボーション」のような聖書の御言葉の分かち合いの信徒同士の静かな語らいのひとときを持つ必要性に迫られているような気がする。

「信仰生活50年」

少し脱線したようだ。信仰継承は一人称で語れと言った以上、そうしないわけにはいかない。私は今年の10月で数え年で古希を迎える。聖書を初めて手にしたのは1958年(昭和28年)小学校2年の時だった。同じ社宅に住む隣人の誘いで、当時の北足立郡上尾町に教会はなく、大宮教会の牧師が経営する開設されたばかりの上尾駅にほど近い幼稚園の日曜学校だった。中学3年生の15歳で洗礼を受けた。町内にあった3つの

教会が合同して上尾合同教会として発足した1960年、12月25日のクリスマスだった。同教会第1号(その時の受洗者6人)の受洗者の1人。その中身はどうであれ、信仰生活は50年以上の歩みをたどっている。

「ノンクリスチャンの女性と結婚」

大学はキリスト教主義の青山学院大学に入学。卒業直後の5月には仙台に転勤、宮城県庁に近い仙台外記丁教会(現仙台川平教会)で2年3か月お世話になった。七夕の翌日、秋田に転勤。ここでは秋田高揚教会に通った。ここで3年3か月、東北生活5年半で東京本社へ。ノンクリスチャンの女性と結婚。2人で礼拝に出席した。長男、長女も生まれ、教会付属幼稚園に入園。やがて四国の松山に家族一緒に転勤。松山では松山番町教会に家族4人がお世話になった。松山で家族が1人増え5人となった。次女の誕生。毎日道後温泉に家族一緒に浸かりながら水曜日の夜の祈祷会にはできるだけ出席するよう心掛けた。

「妻の救いの祈り」

そこで未信者の妻の救いの祈りを毎回、熱心に捧げた。牧師も責任を感じたのか、心温まるご指導の下に、めでたくクリスマスの時だったか、小島 誠志牧師から妻が洗礼を受けた。結婚して既に十数年経っていた。1人称からの第1号の信仰継承者と

なった。小島牧師はその後、日本基督教団の総会議長にもなられた。長女は付属の親愛幼稚園を卒園、道後小学校へ。妻は付属幼稚園のママさんコーラスを立ち上げ、奉仕させていただき、松山での地方生活を謳歌したようだ。

信仰の継承ではもう1人。次女が高校1年生のクリスマスに受洗した。信仰継承の第2号だ。キリスト教主義の明治学院東村山高校ではハンドベルクワイアやゴスペル部で活動。

長男もキリスト教主義の聖学院高校に在学したが、無宗教の大学を選んだ。長男、長女も生まれた時から教会に通ったが、それも中学校まで。部活や受験でそれどころではなかったようだ。自然と教会を離れた。

「YMCA に情熱」

私は今、YMCA に熱を入れている。教会がだめなら YMCA がある。「教会から YMCA へ」、「YMCA から教会へ」と若者たちを導く理想に夢を膨らませているのだが、これも現実的には極めて困難な情勢にある。YMCA 経由の遠回りした我が子の教会復帰は幻に過ぎないのか。

「欺瞞的家庭礼拝を敬遠」

子どもたちが小学生のころは食卓での家庭礼拝、祈りの後に食事する風景が普通だった。子どもたち自身が積極的に手を合わせ祈りの姿勢を示した。しかし、成長する

につれ、当たり前のことだが思春期の頃を迎えるとセレモニー的、欺瞞的な家庭礼拝を敬遠するようになった。妻とも家事や育児、教育の在り方などをめぐって鋭く対立、アットホームとは言えない不正常な状況にある。夫婦、親子のコミュニケーションは本当に難しい。身近な存在ゆえに理解できるように理解できない宿命的なものを感じる。抜き差しならない関係、接点が見いだせなくなった関係の修復は神様に委ねるしかないといひたすら悔い改めの日々でもある。

「葛藤の日々のクリスチャン家庭」

私の身の回りにも外からはうらやましがられるような理想的な家庭と思われている家族の内実は、正反対という例をヤマほど知っている。まさに地獄、葛藤の日々を過ごすクリスチャン家庭のなんと多いことか。信仰の継承というところではない深刻な家庭回復の援助が必要な信者たちの対応を教会はどう考えているのか。「どうぞ、ご勝手に。自業自得でしょ」なんて考えたら、教会の存在価値はない。そんなことはみじんも考えていないと断言するのが100%。でも、実際は何もできない。右往左往しているのが実態ではないか。苦悩する人々、生きがいを求めて教会の扉をたたく人、たたきたい人は大勢いる。「地域に開かれた、密着した、弱者に寄り添う教会」

という本来の教会のあるべき姿がキャッチフレーズ倒れに、プロパガンダになってしまっただけは神様に対してあまりにも不誠実だ。

「最後は神様の時」

特に家族の信仰継承では、地区壮年部の研修会での席上、埼玉和光教会の三浦 修牧師は「最後は神様の時なのです。必ず神様の時、カイロスがあることを信じてそのことを待とうじゃありませんか」と的確な表現で心温まるメッセージをいただいた。

インターネットで見つけたメッセージを最後に記す。元銀座教会牧師で元青山学院長の深町 正信牧師の銀座教会での「信仰継承の使命」という題の説教だ。「信仰は神様の業に属する事柄。その子どものキリストと出合う神の時がある。信仰は親から子へ財産のように譲り渡して、引き継ぐ性質のものではない。神様の恵みとして神様から与えられる賜物だ。それだからこそ、主に祈って神の業として伝道に参加するものでありたい」。(2000年8月6日の銀座教会創立110周年での礼拝説教)。=テモテの手紙二1 / 3 ~ 8 =



＜私が考える信仰継承の問題＞

「亡き妻の信仰を継承、キリスト者に」

「子どもたちの救いを我慢強く待ち続ける」

「ギデオンで信仰の継承を実践する日々」

越谷教会員 荻田 久次郎

「あなたがわたしを選んだのではない。わたしがあなたを選んだ」(ヨハネ 15/16)

「お寺様・仏教の環境で育つ」

私は神奈川県丹沢山系の裾野、愛川町に生まれた。家は曹洞宗・勝楽寺の古くからの壇家でお寺様には常日頃から出入り、宗教は即お寺様・仏教という環境で育った。大学受験は、京都の同志社大学、上智大学の両校に合格、上智大学に進学した。特にキリスト教に興味があっわけではなく、入学金、授業料とも他大学より安く、外国語に興味があったのが理由。当然カトリックの大学のため宗教学が必須科目でフランス人神父から聖書を学んだ。宗教学は赤点、仲間の2人と一緒に就職担当教授に頼み込み、追試験でなんとか危機を脱出した次第。

「ギデオンから1冊の対訳聖書」

就職後十何年か経ち、ある日空しい気分で通勤途中、一冊のギデオン協会の和英対訳の聖書を貰った。その聖書を通勤電車の中でいつも読んでいた。そんな折、乳癌のため入退院を繰り返していた亡き妻が、闘病中に日本基督教団東久留米教会の浅野悦昭先生から臨床受洗し、平成6年6月に昇

天した。その後私も東久留米教会の礼拝に出席するようになり、み言葉に慰められ、翌年のイースターに浅野先生より受洗した。大変遠回りだったがやっと神さまを選んで(救い上げて)頂いたのだ。今を思えば、気付いた時には神さまは既に私の傍におられ、声を掛け続けておられた。

「早朝、校門の前で聖書を配布」

神さまがイエス様を通し私を贖ってくださったのだ。この恵みを未だ主イエスの御父である神さまを知らない多くの人達に分け与えたく、ギデオン協会に入会、早朝、学校の校門の近くに立ち、登校して来る生徒さん達一人一人に「バイブル・聖書です。読んで下さい。」と言いながら手渡す日々だ。

「人はパンだけで生きるのではない。神の口から出る一つ一つの言葉でいきる」(マタイ 4/4) そうです、聖書は神の言葉である。その一つ一つのみ言葉に慰められ、その一つ一つのみ言葉に生かされる毎日だ。

「社会的、個人的2つの観点」

本題の信仰の継承について、社会的、個人的な2つの観点から考えてみたい。先ず社会的側面では、全世界的に宗教離れの傾

向があり、キリスト教国の北米、南米諸国にその傾向が強くなっているという。勿論、7～8%の人口がクリスチャンという中国や一部の発展途上国（インド、アフリカ諸国）等を除いての話だが、ではどうしてなのか？

「価値観の多様化」

先ずは、情報の多様化、マスメディアの発達に伴い、価値観も多様化し、人々が自分の求める現世的な事柄に追われ、精神的な心の問題をないがしろにしていると考えられる。

「宗教家たちの怠慢も」

次に、宗教の名の下にテロ（アルカイダ）や国際紛争（中東諸国）、犯罪事件（オウム事件）等が多発、人々の宗教離れを後押ししている。その他宗教間の対立抗争（キリスト教とイスラム間）も影響しているのではないか？また、宗教家達の伝道に対する怠慢も挙げられる。

「家内は牧師の孫」

個人的な側面では、特に日本国内にクリスチャンが1%にも満たないのは？300年以上も続いた徳川幕府によるキリスト教禁止令、仏教の檀家制度、明治以降も国による神道擁護政策が日本国民をキリスト教嫌いにしてしまった。私は個人的にはキリスト教とは縁のない環境に育ったが、現在は越谷教会に席を置き、日本国際ギデオン協会に所属し地域の伝道に励んでいる。

家族については、家内は牧師の孫で元々クリッチャンファミリーの環境で育ち、同じくギデオンに奉仕している。

「大人になったら礼拝に行かない」

子供は幼稚園の頃までは教会の付属幼稚園に通ったが、大人になったら教会の催しには参加するが、礼拝には参加しない。将来何時かは教会に招かれる事を我慢強く待ち続けている。その日、その時がいつかは主のみが知っておられると思う。主のお招きをお待ちする。

「韓国のキリスト者との違いは何」

最後に隣国、韓国のキリスト教会につき触れたいと思う。越谷教会と交流のある韓国、光明市の啓明星教会の信徒と子ども達が来日された際、子供達を我家にホームステイした後、ソウルに訪問し啓明星教会を訪ね、夕礼拝にも招かれ主を讃美する機会を与えられ、又、別な機会に釜山旅行をした際、ホテル近くの教会を訪ねた際も韓国の方々がいかに熱心に、声高らかに主を讃美しているかを体験した。韓国では25%から33%の方々がクリスチャンであると言われている。街の中には大きな教会があちらこちらに見られる。どうして両国の間でこの開きがあるのでしょうか？？

「自分が考える信仰継承の問題」

「牧師の息子の誘い、義理で礼拝に」

「面白いことに溢れていた教会」

「素晴らしい御言葉との出会い」



飯能教員 市川 浩

私は 1965 年に埼玉県飯能市で生まれた。家族・親類にキリスト教徒はいない。生家は山の中、隣の家が 100 メートル先、しかも既にその一家は既に町へ移住、市道へ出る 1 キロ以上先が人家という所で育った。人見知り激しく、小・中学校時代はいじめられっ子だった。特に小学校の頃には、6 年間ほとんど口を聞かなかった、と記憶する。まだ健在な母に言わせると、家では一人でブツブツ呟いている不気味な子であったとのこと。(親ながら失礼な人です！)

「中学校はミッションスクールに入学」

中学校は、地元飯能にあるミッション系の聖望学園（高等部は甲子園野球で有名に）に入学。両親が学区の公立中に行くといじめ殺されるかも、と判断したためだった。この学校で初めて聖書にふれた。特に求めるものも、慰めになるものもなかったが、聖書の中の話は、創世記や出エジプト記に出てくる奇跡も、福音書でのマリア様によるイエス様の処女降誕やイエス様の起こす奇跡も素直に受け入れた。2 年生の夏休みに通読をした。口を利かず準コミュニケーション不良は続いていた関係で、球けり（下手くそレベルのサッカー部の練習）しかすることがなく、暇潰しというわけ。旧約の歴史書が面白くてハマった。

高校は某県立高校に。サッカー部に入部、そこで生まれて初めて友達ができる。現在坂戸いずみ教会の主任担任教師をしている山岡創牧師だ。山岡先生に関しては、以後敬称を

略し、君付けでお呼びする。

彼は高校入学の年のイースターに受洗していた。私はミッション系出身ということで、お互い親しみを持った。なにしろ、山岡君は成績優秀・サッカーでも抜群の文武両道派。私とはかけ離れた存在だったから、私に親しくしてくれる要素はそのくらいしか考えられないのである。

高校卒業後も付き合いが続き、共に 2 浪（山岡君は献身の道への神様の試み、私は単なるアホが原因）後大学に入った。その年の 1986 年 11 月、彼は自分の所属する教会の特別伝道礼拝に招いてくれた。父上の山岡磐・幸子両先生が牧会する川越市の初雁教会だった。

私は、あまり深く考えずに出席した。友達が誘ってくれたから、特に拒否する理由もなかったから。一回だけ義理立てするつもりだった。礼拝は中学校で経験していたので、窮屈な思いや変な感じはしなかった。次の週の主日礼拝にもなぜか出席した。

「不思議な現象」

山岡君は驚いてくれた。それ以後礼拝出席を続けた。求めるものが何かあったわけではないのであらためて考えると不思議な現象。たぶん、礼拝出席をやめてしまったら山岡君への義理が立たないと感じていたのでしょう。彼は牧師・伝道師夫妻の息子でしたし、東京神学大学の神学生、初雁教会の教会員に対するメンツもあるだろうと思った。せっかく誘った友達がすぐやめてしまったのではメンツ

まるつぶれでは？いじめられっ子なら解ると
思うが、何がいやとって人前でメンツを潰
されることほどいやなものはありませんから。

礼拝出席を続けているうち素晴らしい御言
葉とも出合い、婦人会や青年会での交わりを
与えられ（武蔵豊岡教会の栗原清先生や群馬
地区桐生市にある泉町教会の佐藤泉先生、西
東京教区調布教会の田村博先生などが当時の
青年会の仲間）1988年12月25日に受洗した。
以上は前置き、以下本題に入る。で、教会生
活は楽しかったか？

実は、必ずしも楽しいものではなかった。
教会には自転車を通ったが、自宅のある飯能
市の山中から川越までは30Km以上あるので
大変。先輩教会員の皆さんの顔と名前や事情
を手探りしたり、教会での独特の用語やお祈
りのしかたを覚えたり、所謂「空気を読む」
のに神経を使ったり、頑張って教義の勉強を
したり、楽しいとか癒されるとかよりは、む
しろ教会では緊張の方が大きかったと思う。
仕事の関係で1990年4月～1999年3月まで
東京西教区（当時は支区）の八王子教会で過
ごし、1999年4月以後、実家のある飯能教会
で教会生活を送っているが、その中では、教
会活動や奉仕を熱心にするを信仰と取り
違えるような偶像礼拝の罪を自覚させられた
りした。

「主による招きで定着」

教会と関わらない方がこの世的には余程楽
に生きられたのでは？とさえ思ったほど。勿
論、主による招きがあったから教会に定着し
たと信じているが、この世的見方では、山岡
君への義理を果たすために教会から離れない、
というのが自分の本音でした。余り信仰的
ではないですね。

では、「義理を果たす」以外に教会生活に喜
びはなかったのか？そんなことはない。楽し
い事は少なかったけれど、面白い事は溢れて
いた。教会学校での奉仕や役員としての働

き・大変・苦勞・困難・苦手意識充満等々の
連続で心の休まる暇もないが、でも、それが
いい。いろいろ取り組んで、成果が見られな
くても、認識は広がる（自分はこのに至ら
ず・罪深かったのかとか）。それが面白い。聖
霊の働きと云っていいのでしょうか？

「信仰の継承」は大変難しい問題だ。継承
には相手が出て、相手と自分の思いが一致す
ることが保障されていないから。「信仰の継
承」ということを伝道と同義とみて、教会生
活がその中心になるなら、「教会生活は楽しい
ものだ、でなければならぬ」、「教会に來れ
ばホッとすると癒される、でなければならぬ
」という視点をずらしてみたらいかがでしょ
うか。本来、「教会生活の継続は結構大変な
もの」かも知れないのだ。そのような視点か
ら見れば、「信仰の継承」問題に追い詰められ
るような気にはならないのではないか。余裕
から出てくるアイデアは貴重。「一旦引いてス
ペースを作り、リズムを整え、一気に攻め上
がる」（サッカーの比喩）みたいな。

「伝道しないことは罪」

同時に、以下の事も考えている。今年（2013
年）のクリスマスに一人の女子学生が受洗を
予定している。21歳。飯能教会の現住賠償会
員のうち、常時礼拝出席している方で次に若
い会員は35歳の男性。このギャップ、どうす
るんだろうという感じ。もしこの受洗予定者
が数年で教会を離れたとして、その主因が、
同世代の信徒と共に励まし合ったり学びあっ
たりすることができなかつたためだとしたら、
先に教会員であった私達は大きな罪を犯した
ことになる。彼女の世代の人々に対して積極
的に伝道をしていなかった（したかも知れな
いが成果が得られなかつた）ということで、
同世代の仲間を提供できなかつたため、彼女
をつまづかせたことになるから。やはり、端
的に言って、伝道しないこと、は罪なのであ
る。気合いを新たにさせられた。

「わたしと信仰の継承」

「受洗後既に四半世紀、感謝の日々」

「英語と日本語で捧げる祈り」

「幼児期の英語教室でイエス様と最初の出合い」



私は昭和 18 年 6 月 18 日東京渋谷区広尾の日赤産院(現在日赤医療センター)で産声を上げた。まだ、日本がアメリカに戦争を仕掛けて一年半のこと。家は港区白金にあった。父は陸軍将校(敗戦時中尉)で、陸軍でも潜水輸送艇を開発し始めた、第 7 陸軍科学研究所に所属、朝鮮半島の仁川に私が 1 歳を過ぎたころ、3 才の姉と母と四人で月尾島に住んでいたそうだ。そのあと、配属替えがあつて 1 年もたたずに東京へ戻る。

「東京大空襲に遭遇」

昭和 20 年 3 月 9 日から 10 日にかけて東京大空襲に遭遇し、その直後、臨月間近の状態、母は東京西多摩郡の沢井村へ疎開する。戦争の終わった 8 月 15 日、私は奥多摩の山間地、2 才と 2 か月だった。その後、港区白金の家に戻った。

昭和 22 年東京中野での借家住まいの時、姉が結核で亡くなり、そして、下の妹が 3 月初旬に生まれる。ちょうどこの頃、私は母が見つめてきた、金物屋の屋根裏部屋での英語教室に通い出す。四本の横線、うち一本は赤線の入ったノートと鉛筆を持って。

大文字は ABCD、小文字は abcd、犬は Dog、猫は Cat、象は Elephant…。勉強が終わると、先生が絵本を取り出し、イエ

埼玉和光教会員 小山一郎
ス様の奇跡物語のお話をしてくれた。イエス様との出合いである。ある日、いつものように、金物屋の屋根裏部屋で、この先生の来るのを待っていた。突然、下から金物屋のご主人の大きな声が聞こえた。「先生は天国へ行っちゃったよー」。その時、わたしも死んだら天国へ行くのだな、と知った。満 4 歳の時だ。このあとは、西武線都立家政駅から一人で、高田馬場駅まで高田外語学院に英語の勉強を続けるため通った。片道小児 5 円だったと記憶?その後、中野区の私立の金星幼稚園へ入園する。園長先生はアメリカ人の白人女性。理事長はご主人の日本人。3 クラスの担任の先生 3 人は混血の御嬢さん先生だった。ジーザス・ラブスミ・ディスアイノー……。トゥインクル・トゥインクル・リトルスターなどを歌ったものだ。

「夕方の聖研での祈り」

私は現在埼玉和光教会の教会員。1988 年 4 月 3 日イースターに洗礼を受けた。45 歳の時だった。約 40 年間無宗教の世界にいたことになる。受洗後既に四半世紀を過ぎ、神様に守られている日々に感謝。

「祈る仲間」

日曜礼拝のほかに、1992年10月28日から「水曜日の夕方の聖書の学びと祈り会」に出席するようになった。やがて順番に教会員を「祈る仲間」と称して、祈り合うようになり2013年2月27日(水)は何度目かの私が祈られる順番になった。レント13日目のこと。そして、1992年から数えて1048日目(うち36日は欠席)の水曜日の夜、私は祈られたことに答えて、英語と日本語で祈りをささげた。

Our Father in the heaven

I was known “Jesus Christ” in my small age, by aged minister, after study English.

Maybe twice a week, Monday and Thursday.

One day, usually, I was waiting this teacher is coming in the attic a hardware store.

Suddenly, I heard a big voice of hardware store’s master, “The teacher went to heaven”.

At that time, I knew I am going to heaven after I died, too..

Since that time, sixty five years gone. I can say, thank you for my God, leading by you and your sacred profession,

I am praying by minister and fellows in the Church

I will stand at this point, and continue to walk the way of God

These player for you by the name of Jesus Christ, Amen

<2013年埼玉地区壮年部

「信仰の継承について考える」集い>

開会礼拝司式者としての祈りを紹介したい。

主なる神様、私たちの暮らす、この地球の、自然環境、そして社会環境も、いま、新たな、大きな、大きな、変化の中にあります。神がご自分に似せて、この地上に、最後に造られた人間そのものも、新たな変化の中にあります。一週間の時の巡りと共に、教会における礼拝を守り、更なる信仰の法則を学んでおります。神を知っていながら、それでも、人の犯す罪。そして、その罪を贖うために、独り子を、贖いの供え物とされた、神の真実を、今日も学びました。新たな一週間の旅路へと送り出された今、又こうして、埼玉地区壮年部の研修会へと導かれ、このような礼拝に集えましたことを、感謝いたします。この礼拝と、このあと持たれます、主題講演と、続いてもたれます分団討議の上にも、主の導きと、祝福がありますようにと願います。この感謝と願いとを、主イエス・キリストの御名により、御前にお捧げいたします。✠アーメン。

「私と信仰の継承」ということで人生の最初のきっかけと現在の祈りまでを書きました。

地区壮年部 最近16年間の活動

1998年

- 2月22日 大宮教会 高齢者問題懇談会 「高齢化社会とキリスト者の役割」
講師：河 幹夫厚生省社会局施設人材課長（同盟基督教団和泉福音教会員）
- 5月17日 埼玉新生教会 総会 開会礼拝 説教「共に歩む教会 担い合う宣教の業」
三永旨従所沢武蔵野教会牧師
- 9月23日～24日 県民活動センター泊修養会伊奈町「人生の秋を豊かに」一聖書における老いの意味一
講師：最上 光宏浦和東教会牧師
信徒発題「信仰の継承」 抜井 太郎壮年部委員（志木教会員）
- 11月15日 大宮教会 信徒修養会「会堂建築を成功させるには」信徒発題：松下 充孝大宮教会員
「信仰継承の成果をあげるには」信徒発題：上松 寛茂上尾合同教会員

1999年

- 2月21日 大宮教会 講演会「いと小さき者の一人に」
講師：天羽 道子かにた婦人の村施設長（千葉県館山市大賀）
- 5月16日 大宮教会 総会 開会礼拝 説教「私も働く」 中谷 清熊谷教会牧師
- 6月20日 大宮教会 講演会「伝道へー礼拝からの出発」
講師：小島 誠志日本基督教団総会議長、松山番町教会牧師

2000年

- 5月28日 上尾合同教会 総会 開会礼拝 説教「福音の伝播クレ・シモンに学ぶ」高橋悦子桶川伝道所牧師
出席18教会 32人
- 5月28日 壮年部創部30周年記念誌発行 総会出席者及び各個教会に配布
- 10月29日 大宮教会 講演会「伝道へー礼拝からの出発」講師：山崎 美貴子明治学院大学副学長
出席 23教会 69人

2001年

- 2月25日 埼玉新生教会 総会 開会礼拝 説教「真の富」田中 かおる安行教会牧師 出席13教会 39人
- 2月27日 大宮教会 講演会「ひとにぎりの土」
講師：小澤 貞雄秋津教会牧師（多摩全生園）
- 10月14日 各ブロック壮年会員によるシンポジウム「魅力ある教会づくり」（信仰の継承と教会員の高齢化）

2002年

- 2月24日 大宮教会 総会 開会礼拝 説教「失われるもの、実るもの」柳下 仁北川辺伝道所牧師
- 5月26日 大宮教会 講演会「自由において共に生きよう」
講師：関田 寛雄青山学院大学名誉教授（礼拝説教も）

2003年

- 2月23日 埼玉新生教会 総会 開会礼拝 説教「神の御賞賛を目指して」中村 忠明埼玉新生教会牧師
- 9月14日 大宮教会 講演会 開会礼拝 「白髪になっても実を結ぶ」山岡 創坂戸いずみ教会牧師
講演「老いを生きる」講師：阿部志郎横須賀基督教社会館館長、神奈川県保健福祉大学長

2004年

- 2月15日 大宮教会 総会 開会礼拝 説教「主を待ちのぞむ」鎌田 康子越谷教会副牧師
- 5月16日 大宮教会 講演会 開会礼拝「枯れた骨の復活～預言者エゼキエルの体験～
講師：大宮 溥日本聖書協会理事長、成瀬が丘教会牧師、阿佐ヶ谷教会名誉牧師
「聖霊の息吹を受けて」一信仰の継承を願って一

2005年

- 2月20日 大宮教会 総会 開会礼拝 説教「カナの婚礼」森 淑子狭山伝道所牧師
- 7月17日 大宮教会 「認知症の正しい理解一心のケアと信仰一」
講師：長谷川 和夫認知症介護研究・研修東京センター長
聖マリアンナ医科大学名誉教授、銀座教会員
- 開会礼拝 「主の恵みを共に～認知症への主の眼差しを読みとろう～
石川 栄一北本教会牧師
- 9月23日 大宮市民会館 1日修養会「共に学び、共に考えよう～教会の成長～」
講師：疋田 國磨呂大宮教会牧師

2006年

- 2月19日 大宮教会 総会 開会礼拝 説教「私は福音を恥としない」最上 光宏浦和東教会牧師
- 7月30日 大宮教会 講演会 「老いをどう生きるか～希望を支える信仰と老後～」
講師：児島康夫川越キングス・ガーデン施設長日本ホーリネス教団川越のぞみ教会員
- 開会礼拝 「聖霊による無償の賜物が一人一人に」 疋田 勝子大宮教会副牧師

2007年

- 2月18日 大宮教会 総会 開会礼拝 説教「祝福と賛美」柳田 剛行 台湾基督教会牧師
出席15教会 28人
- 9月17日 大宮教会 1日修養会「共に生きる生活～教会の活性化～」講師：疋田 國磨呂大宮教会牧師
- 11月25日 埼玉新生教会 講演会「国籍は天に」
～特別養護老人ホーム・スマイルハウスのターミナルケアの試み～
講師：仲矢 杏子スマイルハウス施設長
開会礼拝 「ただ一つのこと」 金田 佐久子西川口教会牧師

2008年

- 2月17日 大宮教会 総会 開会礼拝 説教「壮年の使命」竹内紹一郎 深谷西島教会牧師
出席14教会 26人
- 6月29日 大宮教会 修養会 開会礼拝 説教「生き生きと共に生きる教会生活」疋田國磨呂 大宮教会牧師
主題「御言葉の聴き方について・共に生きる教会生活」
～ボンヘッファーの真実な交わり～
講師：疋田 國磨呂大宮教会牧師 出席：13教会 60人
- 11月16日 大宮教会 こうえん会 福音落語「めめんともり・石打ち」出席：14教会 66人
出演：古琴亭志ん軽（本名・齋藤 和夫氏 代々木上原教会員）
詩吟「西郷 南州・いつくしみ深き」出演：豊川耕颯（本名・豊川昭夫氏越谷教会員）

2009年

- 2月15日 岩槻教会 総会 開会礼拝 説教「隅の親石」川中 真 岩槻教会牧師 出席13教会 31人
- 7月19日 大宮教会 修養会 開会礼拝 説教「すべての民をわたしの弟子にしなさい」
疋田 國磨呂大宮教会牧師
主題「これでいいのか？今の教会」～データから10年先の姿を観る～
（資料 教団50年データ分析と提言 制作：教団予算委員会 CD-ROM 映写）
講師：疋田 國磨呂大宮教会牧師 出席：16教会 70人
- 11月29日 大宮教会 講演会 開会礼拝 説教「現代に合った伝道パラダイムの転換」
疋田 國磨呂大宮教会牧師
主題「四世代が喜び集う教会形成」～高座教会の取り組み～
講師 カンバーランド長老キリスト教会 高座教会 松本 雅弘牧師
出席12教会 71人

2010年

- 2月28日 大宮教会 総会 開会礼拝 説教「御言葉が栄える」 石橋 秀雄越谷教会牧師
出席14教会 23人
- 7月18日 大宮教会 修養会 主題「神の国のビジョンに生きる教会」～ゆりかごから天国まで～
講師 日本同盟基督教団 西大寺キリスト教会 赤江 弘之牧師
出席14教会 54人
- 11月28日 大宮教会 講演会 開会礼拝 説教「主に用いられる弟子たち」疋田 國磨呂大宮教会牧師
主題「誰でもホッと群れに向かって」～地域との結び付きを大切に教会～
講師 日本同盟基督教団 土浦めぐみ教会 清野 勝男子牧師
出席14教会 60人

2011年

- 2月27日 大宮教会 総会 開会礼拝 説教「さあ、見に来て下さい」 木ノ内 一雄 川越教会牧師
出席15教会 32人
- 6月26日 埼玉新生教会 開会礼拝 説教「分かち合う喜び」 埼玉地区委員長 土橋誠牧師 飯能教会
講演会 主題「戦後最大の危機の中で」～教団・教会・私たちは～
講師 日本基督教団 総会議長 石橋 秀雄牧師 出席15教会 41人
- 11月13日 大宮教会 開会礼拝 説教「主イエス・キリストの貧しさによって」
聖学院大学学長 阿久戸光晴先生
講演会 主題「福島第一原発事故・脱原発をどのように受け止めるか」
講師 聖学院大学学長 阿久戸光晴先生 出席11教会 37人

2012年

- 2月19日 大宮教会 総会 開会礼拝 説教「支え合う教会」栗原清牧師 武蔵豊岡教会 出席15教会 28人
- 6月17日 大宮教会 開会礼拝 説教「つながってこそ、教会」関東教区副議長 飯塚拓也牧師 竜ヶ崎教会
講演会 主題「今こそ、『つながり』の時」～共に苦しみ、共に喜ぶ～
講師 関東教区副議長竜ヶ崎教会 飯塚拓也牧師 出席9教会 30人
- 11月11日 大宮教会 開会礼拝 説教「苦難と希望」アジア学院校長 大津健一先生
講演会 主題「苦難と希望」～地震・放射能被害に向き合って～
講師 アジア学院アジア農村指導者養成専門学校校長 大津健一先生出席11教会 37人

2013年

2月17日 大宮教会 総会 開会礼拝 説教「信仰生活の秘訣」春日部教会 白石 多美出牧師
出席者14教会26人
11月17日 埼玉和光教会 研修会 「信仰継承を考える」集い
開会礼拝「信仰の宿り」 埼玉和光教会牧師 三浦 修 先生
講演会「信仰の継承について一教会編・地域編・家庭・親族編一」
講師 埼玉和光教会牧師 三浦 修 先生
分団協議 12教会39人

定期総会・委員会の開催 2013年度（2013年2月1日～2014年1月31日）

定期総会 2月17日 大宮教会
委員会 2月17日 大宮教会、3月17日 埼玉和光教会、5月19日 越谷教会、7月21日 西川口
教会、9月22日 春日部教会、9月23日 春日部教会、11月17日 埼玉和光教会、2014
年1月19日 上尾合同教会

2013年度委員会組織

委員長 松下 充孝(大宮) 書記 市川 浩(飯能) 会計 田島 章義(春日部)
委員 小山 一郎(埼玉和光) 荻田 久次郎(越谷) 柏田 實(西川口)
瀧川 市郎(熊谷) 土門 嘉樹(上尾合同) 樋口道成(岩槻)
協力委員 上松寛茂(上尾合同) 島崎 光雄(武蔵豊岡)
地区委員 壮年部担当 小岩 晃(上尾合同)

日本基督教団関東教区
埼玉地区壮年部ニュース
「埼玉・教会・壮年」NO. 13号
2014年2月16日発行
発行人：松下 充孝 編集人：上松 寛茂